

保育活動分析・研究への試み 2

— 保育者のボール遊びの指導の説明部分から —

○関口 準 橋本真理子 後藤千鶴子 常田奈津子 二階堂邦子(日本女子体育短大)

I. 目的

前回(38回)は試みに3名の保育者のボール遊びの指導の説明部分についていくつかの視点から分析を行った。今回はそれらを踏まえ対象者とふやり分析・検討をする

II. 方法

分析対象者：M園の5歳児担当保育者A（保育職経験10年）B（同3年）C（同2年）
N園の5歳児担当保育者D（同18年）E（同12年）
F（同7年）G（同7年）の計7名

分析内容: 言語機能カテゴリー

- 1 方向づけ: ねらい・活動にむけての動機づけの発語
- 2 注意の喚起: 呼びかけや幼児の意識をある目的のために集中させる発語
- 3 教示: 具体的に情報・知識・行動をさし示す発語
- 4 確認: 教示の内容の再確認に関する発語
(訂正・強調を含む)
- 5 質問: ①相手に何らかの説明を求めて発せられたもの
② Yes, No. のいずれかを尋ねるもの
- 6 指示命令: 直接相手に一定の行動をさせるための発語
- 7 はげまし: 意欲を助長させる発語

行動機能カテゴリー

- a. 幼児に注意を集中させる：手を叩く、幼児のそばに行く、言語以外の音を使うなど
- b. 指示説明する：具体物を指さす、触れる、持っていく、指示説明したいところに移動させるなど
- c. 言動や考えに興味を示し（なり受け入れに）、賞讃し（なり）する：幼児の方を向く、頭をたてに振る、目と目を合わせて注視する、拍手するなど
- d. 指示命令する：指さす、手とかる、具体物と使う、特定の場所を見る、幼児にふれるなど
- e. 言動や考えを禁止、拒否する：首を横にふる、怒っている表情とする、幼児の動きをとめる、幼児と叩く、手と振るなど

III. 結果

- 1 説明単位としての活動の流れ
- A イーローハニホへ
- B ニーイーハニローニローホハへ
- C ニーイーハニハニローニへ
- D イーハニハニハニハニローホニへハへ

E ニ-イ-ハ-ニ-口-ホ-口-ホ-へ

F - 1 - A

G = -ハ-口-ハ-ホ=-ホ-へ

2 言語カテゴリー分析

() %

説明単位	備考	1	2	3	4	5	6	7	計
イ 導入	A	0	3	0	1	0	0	0	4(3.9)
	B	0	2	0	0	0	0	0	2(2.0)
	C	0	9	0	4	5	8	4	30(24.2)
	D	1	0	0	0	0	0	0	1(0.9)
	E	1	0	0	0	0	0	0	1(1.5)
	F	0	0	0	0	0	0	0	0
	G	0	0	0	0	0	0	0	0
	ロ モデル を使う	A	1	0	14	3	2	3	1
B		0	5	13	4	1	3	0	26(26.0)
C		0	1	19	1	4	6	1	32(25.8)
D		0	0	16	8	1	5	0	30(28.3)
E		0	1	0	1	2	16	1	21(31.3)
F		0	0	0	0	0	0	0	0
G		0	0	11	4	0	1	0	16(22.2)
ハ ルールの 説明		A	0	0	1	4	5	0	0
	B	0	3	5	4	6	5	1	24(24.0)
	C	0	3	7	0	0	4	0	14(11.3)
	D	0	4	1	6	2	3	1	17(16.0)
	E	0	0	8	3	1	2	0	14(20.9)
	F	0	0	16	6	2	6	0	30(44.8)
	G	1	1	3	1	0	0	0	6(8.3)
	ニ 組分け	A	0	3	6	23	21	3	1
B		0	4	1	1	8	18	0	32(32.0)
C		0	2	1	9	7	21	1	41(33.1)
D		0	1	1	11	4	23	0	40(37.7)
E		0	0	0	2	0	8	0	10(14.9)
F		1	0	1	8	2	22	0	34(50.7)
G		0	1	1	3	2	19	0	26(36.1)
ホ ルールの 確認		A	0	1	1	3	1	2	0
	B	0	0	0	3	1	8	0	12(12.0)
	C	0	0	0	0	0	0	0	0
	D	0	1	0	8	5	0	0	14(13.2)
	E	0	0	2	15	1	2	0	20(29.9)
	F	0	0	0	0	0	0	0	0
	G	0	0	0	16	2	5	0	23(32.0)
	ヘ ゲームの 開始	A	0	0	0	0	0	0	0
B		0	0	0	0	0	4	0	4(4.0)
C		0	0	0	0	0	4	3	7(5.6)
D		0	0	1	1	0	2	0	4(3.9)
E		0	0	0	0	0	1	0	1(1.5)
F		0	0	0	0	0	2	1	3(4.5)
G		0	0	0	0	0	1	0	1(1.4)
計		A	1(1.0)	7(3.8)	22(21.4)	34(33.0)	29(28.2)	7(7.8)	2(1.9)
	B	0	14(14.0)	19(18.2)	12(11.2)	16(15.0)	38(36.8)	1	100(100.0)
	C	0	27(27.0)	27(26.3)	1(0.3)	5(4.7)	6(5.8)	7(7.3)	124(100.0)
	D	1(0.9)	6(5.7)	19(18.2)	34(33.1)	12(11.3)	33(32.2)	2(1.9)	106(100.0)
	E	1(1.5)	1(1.5)	10(14.3)	21(28.9)	4(5.6)	29(39.2)	1(1.5)	67(100.0)
	F	1(1.5)	0	17(23.3)	14(18.9)	4(5.6)	30(40.5)	1(1.5)	67(100.0)
	G	1(1.4)	2(2.8)	24(32.3)	24(32.3)	5(6.6)	26(35.1)	0	72(100.0)

3. 行動機能カテゴリー分析

I =  II =  III = 

a 注意を集中させる

単位 %

A	 10.0	 10.0	 80.0
B	 10.0	 32.0	 58.0
C	 22.0	 42.2	 35.6
D	 25.6	 30.8	 43.6
E	 11.2	 44.4	 44.4
F	 22.2	 33.3	 44.5
G	 16.7	 27.8	 55.6

b 教示説明する

A	 20.0	 10.0	 70.0
B	 8.0	 20.0	 72.0
C	 33.3	 40.0	 26.7
D	 30.8	 15.4	 53.8
E	 22.2	 18.5	 59.3
F	 33.3	 66.7	 0.0
G	 27.8	 22.2	 50.0

c 言動や考えに興味を示し受け入れ、賞讃したりする

A	 16.7	 20.0	 63.3
B	 30.0	 40.0	 30.0
C	 11.1	 42.2	 46.7
D	 51.3	 20.5	 28.2
E	 81.5	 11.1	 7.4
F	 100.0	 0.0	 0.0
G	 77.8	 16.7	 5.5

d 指示命令する

A	 6.7	 13.3	 80.0
B	 14.0	 22.0	 64.0
C	 6.7	 55.6	 37.8
D	 38.5	 25.6	 35.9
E	 18.5	 81.5	 0.0
F	 33.3	 66.7	 0.0
G	 5.5	 16.7	 77.8

e 言動や考えを禁止、拒否する

A	 67.6	 16.7	 15.7
B	 86.0	 12.0	 2.0
C	 57.8	 31.1	 11.1
D	 84.6	 6.1	 10.3
E	 55.6	 7.4	 37.0
F	 66.7	 11.1	 22.2
G	 56.0	 22.2	 21.8

IV 考察

1 説明単位としての活動の流れ

組合せに入る保育者がいることや多いことはそこ

に活動のポイントとしておさえておきたい姿勢が伺われる。遊びを進める為の必要性から「ルール」の説明も多く、同じことを説明したり途中で異なるものが入ったりしてコマ切れる的になったりしている。「ルール」の確認が活動の流れの後半に出てくるのは当然のことであろう。活動の流れにも説明単位が欠落しているもの、入り乱れているもの、一定のパターンの流れのものなどいろいろあるが、これだけで活動の良否を決めつけることはできない。他の視点や要因などから総合的に判断しなければならないであろう。

2 言語機能カテゴリー分析

「モデルを使う」カテゴリーの多い保育者はBCDEであり「教示」も高い数値を示しているがEは「教示」がなく指示命令が高い数値を示している。Eの「教示」がないのは言語的側面以外での働きかけが代行されていたことが行動機能カテゴリー分析からも考えられる。しかし指示命令が高いことは混乱している状況が伺われ、強い働きかけがあったことが裏付けられている。Fは「ルール」の説明では「教示」が多く重要なポイントとしておさえたという姿勢ともいえる。しかし説明単位の欠落や「指示命令」が比較的多いことなどから強い働きかけがあったことが裏付けられる。「組合せ」は殆どどの保育者が多いが、BCDFGは指示命令が高い数値を示している。その中の困難さを表わすと共にかなり強い働きかけがあったということにもなる。しかしAとDは確認が高く、Aは質問も高い。これはADが一方向的に働きかけるのではなく子どもとのやりとりを配慮しているからである。Aは一方向的に決めることとしないで子どもに考えさせ決定させるようにしたことと物語っている。

3 行動機能カテゴリー分析

「注意集中」ではAが多い。これは手を叩くなどの音を使うのではなく子どものそばにいくという形が多いからである。教示説明ではCを除いて全員が多い数値を示している。Cは言語での働きかけに頼っていたとも考えられるが簡単に終らせたので子ども達が混乱してしまった面もある。「興味を示し受け入れ賞讃」でEFGが少ないのは余裕がなかったとも考えられるが言語の考案から厳しさや強い姿勢があったことを示している。「指示命令」でABEFGが多い。子ども達との対応関係を多く持ちとうとしているが強い働きかけがあったことにもなる。「禁止拒否」でABDFが少ない。これは子ども達の活動に対して余り制限をしない形をとって出来るだけ子ども達の活動を尊重しようという姿勢にもなっている。しかしFは言語での強い働きかけはあるが行動では子どもへの興味賞讃も殆どないが「禁止拒否」あまりしないという態度になっていたと考えられる。